

診断・治療に難渋した Periprosthetic Joint Infection への対応

稲葉 裕

Yutaka INABA

横浜市立大学整形外科

人工感染周囲感染(periprosthetic joint infection : PJI)は、治療に難渋する症例が多いため医師・患者ともに負担が大きい。適切な初期診断がなされないと無菌性として何度も再置換術が施行され、骨や筋肉などの欠損が巨大となる症例も存在する。また、不十分な治療により感染の沈静化が得られず、瘻孔からの排膿が長期間持続するような難治例にも遭遇する。今回の特集では、このような臨床上しばしば経験する PJI 難治例に焦点を当てて、その対応について PJI の診療・研究におけるトップランナーの先生方に執筆をお願いした。

まず診断では、病理組織診断は術中診断が可能な重要な検査であり、その有用性に関して岩田栄一朗先生に解説していただいた。細菌培養検査陰性例は起炎菌が不明なため治療計画を立てるのが困難である。その対応について小林直実先生に執筆をお願いし、また新しい検査法として期待される next-generation sequencing について植田成実先生に解説していただいた。

治療では、実臨床で対応に困る PJI 難治例についての的を絞って、巨大骨欠損を伴う症例の手術治療については内山勝文先生に、すでに多数回手術を受けている難治例への手術治療について眞 賢一先生に執筆していただいた。また近年、難治性感染性骨髄炎に対する治療として注目されている CLAP (continuous local antibiotic perfusion) の PJI 治療への可能性について、CLAP の開発者である圓尾明弘先生と、PJI 難治例への使用を行っている崔 賢民先生に共著で執筆をお願いした。抗菌薬治療は非常に重要な項目であるため、第一人者である松下和彦先生に解説していただき、腫瘍用人工関節などの megaprosthesis 感染への対応については森井健司先生に執筆していただいた。また現在、感染予防で注目されている銀含有ハイドロキシアパタイトコーティングやヨードコーティングの PJI 治療への可能性について河野俊介先生と井上大輔先生に執筆していただいた。

このように本特集は、临床上、対応に難渋する PJI 難治例に対する診断と治療に関する最先端の内容となっている。執筆していただいたエキスパートの先生方に深謝するとともに、本特集が PJI 診療の一助になることを祈念する。